

日が明けた6月7日未明、父からの電話に我が耳を疑いました。

「兄が事故に遭った。滝川市立病院にこれから行くこの電話でした。この時間であれば、兄は新聞配達をしているはずである」と思いながら、両親とともに病院に駆けつけました。

病院に着くと、警察官から遺体を確認してもらいたいとのことと、被せられていた布をめくると兄の奥さんでした。次に確認したのは、兄の遺体でありました。

私たちは混乱してしまいました。子どもたちはどうしたんだろう…。

その子どもたちも一緒に事故に巻き込まれていることが分かるのに時間はかかりませんでした。朝方に砂川警察署で遺体となった2人の子を確認しました。

◇ この事故については、信号交差点

で直進同士の出会い頭事故で相手の車が炎上し、兄の車は何十メートルも飛ばされ、4人は即死状態であり、

高校生の長男は事故現場から1・4キロも引きずられたと聞きました。この時、末っ子だけが、生死の境をさまよっている状態です。

私たちは、一家全員が事故に遭い、4人が亡くなったという事実をまともに受け止めることはできませんでした。というよりも、あまりにも突然のことであり、また、一気に4人の命が奪われたという事自体が、夢のこの様にしか受け止められなかったというのが正直なところです。感覚が麻痺してしまったかもしれません。

やがて、遺体の引き渡しを受け、通夜、告別式と多くの報道陣の中、特に自宅に張り付いたり、末っ子の病状を聞きに来る、学校までしつこくやってくるといった記者には怒り

砂川5人死傷事故 遺族のメッセージ

さえ覚えました。あれから半年以上が経ち、今は裁判を待つ状態にあります。

◇ ただ1人生き残った末っ子は、意識も回復し、現在も治療中であり、家族が亡くなったことは本人には知らせておりません。いつかその日が来ると思います。私たち、遺族としては、末っ子のこと pensando 一時は、いっそ一緒に…。といった感傷に見舞われたこともあったことは事実、否定しません。

◇ しかし、今、私たちは「昨日よりもきょう、きょうよりも明日」と残された末っ子の回復を励みにしております。

◇ 特に父は普段無口で無愛想なのに、末っ子の変化が感じられた時は、饒舌に末っ子様子をしゃべります。

この事件で、警察の捜査には感謝しております。ただ、1つだけ遺族の感情としては、報道記者を完全に排除できることなら、そうしてもらいたいということがあります。自宅の周辺を何社も記者がうろつき、入れ替わり立ち替わりやってくる、気分にも良くないし、近所の方にも迷惑をかけることになります。また、記者に1つ答えたら、大きく脚色されて言ってもいないことが報道されました。そういったことが一番腹立たしかったです。

◇ これから、裁判が始まると思います。このようなことは私たちだけで十分です。

◇ 人を恨んでも亡くなった者は帰ってきません。犯人にも家族、子どもがいると思います。事実を素直に認め、罪を償ってもらいたいと思います。